

乙堂喚丑『正法眼蔵統絃講議』写本の研究

菅 原 研 州

一 はじめに

本論は、江戸時代中期に活動した曹洞宗の学僧・乙堂喚丑（二六七四？—一七六〇）の主著として扱われる『正法眼蔵統絃講議』（以下、本文中は「本書」または『統絃講議』と略記）について、この度、発見・確認された写本について検討したものである。

二 『統絃講議』関連略年表

本書は、天桂伝尊『正法眼蔵弁註并調絃』について、特に『正法眼蔵』「面授」巻に係る『弁註』と、『調絃』に対し乙堂が反駁したものである。

これまで判明している本書の成立経緯や関連事項を略年表として記述すると、以下の通りとなる。

年不詳 天桂『正法眼蔵弁解』成立

一七三〇年（享保一五）天桂『正法眼蔵弁註並調絃』成立（龍

水本調絃奥書）

一七三一年（享保一六）江戸赤坂盛徳寺山内にて『統絃講議』成立（本書序文）

この頃か？ 乙堂が面山に『統絃講議』筆削依頼

（『面山広録』巻二二三）

一七三五年（享保二〇）夏に盛徳寺方丈で『統絃講議』再治（本書奥書）

同年 一二月に天桂伝尊遷化

一七四一年（寛保元）夏に『洞上叢林公論』撰述。同書下巻にて乙堂は、『統絃講議』上梓への意欲を見せる

一七四三年（寛保三）『洞上叢林公論』版行

一八六八年（明治元）頃か？ 盛徳寺山内所蔵の『統絃講議』版木を山口屋（森江）書店へ払い下げか？（『正法眼蔵註解全書』別巻・解題）

一八七二年（明治五）西有穆山が上州桐生鳳仙寺に晋住（明治一〇年に遠州袋井可睡斎へ転住）。この頃、同寺内で『統絃講議』の乙堂自筆本発見か？

一八八三年（明治一六）西有穆山が遠州長松院にて『正法眼

藏開講備忘」を提唱し、鳳仙寺所蔵の『統絃講議』乙堂自筆本について言及^①

一八九六年（明治二九）西有穆山・権田雷斧の校訂による『統絃講議』（全五巻。以下、西有校訂本と略記）刊行（出版は貝葉書院）。底本は乙堂自筆本（西有による凡例参照）

一九一四年（大正三）『正法眼蔵註解全書』第一〇巻刊行。『統絃講議』の序や凡例などを除いた、本文を全篇収録。底本は西有校訂本。

一九四五年（昭和二〇）三月、第二次世界大戦中の東京大空襲で、全焼した盛徳寺山内に保管されていた『統絃講議』乙堂自筆本が焼失か？（盛徳寺関係者の証言）

上記内容から明らかのように、本書は従来、西有・権田両名によって校訂刊行された『統絃講議』版本か、安藤・神保両名による編集の『註解全書』収録本に依拠して研究されるしかなかった。しかし、今回、一本の写本が発見され、またもう一本の写本の内容も確認されたことから、従来とは違った底本に基づく研究が行われるべきであることが分かった。

三 『統絃講議』写本二本の紹介

筆者は二〇一七年十二月、本務地の愛知学院大学図書館情報センターにて、本書写本（以下、愛学本と略記）を確認した。本論は、その発見に基づいて論じるものである。また、

既に「曹洞宗文化財調査委員会」が一九八一年一〇月二三日に行った調査によって、長野県山ノ内町興隆寺山内での、本書写本（以下、興隆寺本と略記）の収蔵が報告^②されている。筆者は二〇一八年七月九日に同寺を拝登し、興隆寺本の調査を行った。

以下には両写本の概要を紹介したい。

●『統絃講議』愛学本

- 一、冊数 三冊（巻号は法報応）
- 一、構成 法巻：上之本・上之末、報巻：中之全、応巻：下之本・下之末
- 一、料紙 楮紙
- 一、大きさ 縦二七センチ×横一九・五センチ
- 一、装丁 袋綴
- 一、題目 外題：ナシ、内題：正法眼蔵面授巻統絃講議
- 一、枚数 法巻：六八（二〇＋四八）丁、報巻：七三丁、応巻：一〇四（四四＋六〇）丁
- 一、行字数 平均して毎葉一二行×毎行二五字
- 一、書写年 不明
- 一、書写者 不明（一人による書写）
- 一、所蔵者 現在・愛知学院大学図書館情報センター、旧蔵者・朴魯人（詳細不明）

●『統絃講議』興隆寺本

- 一、冊数 四冊(巻号は開示悟入)
- 一、構成 開卷…上之本・上之末、示卷…中之全、悟卷…下之本、入卷…下之末
- 一、料紙 楮紙
- 一、大きさ 縦二三・七センチ×横一六センチ
- 一、装丁 袋綴
- 一、題目 外題…正法眼藏面授章統絃講議、内題…正法眼藏面授卷統絃講議
- 一、枚数 開卷…五二(二七+二五)丁、示卷…九六丁、悟卷…五六丁、入卷…八七丁
- 一、行字数 平均して毎葉一〇行×毎行二〇字
- 一、書写年 不明
- 一、書写者 不明(四人による書写、入巻は畔上棟仙か)
- 一、所藏者 現在・長野県山ノ内町興隆寺、旧藏者・畔上棟仙(興隆寺一七世、大本山總持寺独住二世)

四 両写本の比較について

両写本を比較したところ、同一と思われる原本から、各々別個に書写されたことが分かった。理由は以下の通りである。

①愛学本には各巻末に原本の紙枚数が記載されていた。その

枚数は、興隆寺本と一致しないため、愛学本は興隆寺本とは別個に原本から書写されたことが理解出来る。

②愛学本の応巻冒頭、興隆寺本の悟巻冒頭の書写方法に違いがある。特に比較すべきは、『正法眼藏』「面授」巻本文第一五段落に対する乙堂の註釈であるが、この「統絃」第一五節相当は、西有校訂本に記載されていない部分である。そして、両写本は、原本で大きく欠けた部分を極力残しながら写していた。

また、愛学本の「統絃」第一五節二行目には、「本初」二字が見えるが、興隆寺本には無い。よって、愛学本の書写時期よりも、更に破損が進んだ状態で興隆寺本が書写されたと推定される。両写本の写本時期の前後を定める際の、参考基準となる違いでもあり、両写本が別個に原本から書写されたことを示す違いでもある。

③書写時期の問題だが、両写本ともほぼ同時期で、前項などから愛学本の方がやや早い時期であったと推定される。具体的には、本書乙堂自筆本を発見したのが西有穆山による鳳仙寺晋住を機会とすると仮定し、それ以降、西有校訂本の発刊(明治二九年)前であろう。つまり、明治五―二九年の間であったと思われる。

④両写本の内容に、同一底本を否定する重大な差異は無い。ただし、両写本とも複数、書写時の誤字や欠落などが見ら

れる。例えば、愛字本には応卷末尾にあるはずの、乙堂による奥書「享保二十歳次乙卯夏再治盛徳方丈裡畢」が無い等である。また、興隆寺本はしばしば、西有校訂本を用いて対校を行い、その結果を頭註に附記している。興隆寺本開卷（上之末）は、「統絃」第三九節で途切れ、以降同卷は欠如している。書写時か、写本整理時に何らかの事故が起きた可能性を指摘するものである。愛字本応卷（下之本）冒頭の一部には乱丁が見られる。

五 両写本と西有校訂本の比較について

西有校訂本については、凡例での記述の関係から、乙堂自筆本をそのまま刊行されたものだと考えられてきた。

右、凡例は乙堂和尚手沢の本の写、一字を換えず、唯だ「欲写去者勿以己意改削焉」の一條のみ除、全書固より一字を加刪せず。〈中略〉穆山謹んで識す³

西有は「全書固より一字を加刪せず」としているのだが、今回両写本と比較することにより、西有校訂本には以下の問題があることが判明した。

①本書の題名

【興隆寺本】〈外題〉正法眼蔵面授章統絃講議

【西有校訂本】〈外題〉正法眼蔵統絃講議

既に内容の検討を通して、「講議」が正しいことが明らかとなっている⁴。その上で、本書校訂に関わった西有穆山は『正法眼蔵開講備忘』の提唱において「講議」「講義」両方が記録されてしまっている⁵。また、同様に校訂者であった権田

雷斧も本書のことを「統絃講義」と表現しており、本書題名の混乱は校訂者両名の誤認によるものであろう⁶。

②各巻の巻数名や著者名の変更
※各巻の巻数名

【両写本】正法眼蔵面授章（または巻）統絃講議上（之本）（以下、下之末までの全五巻）

【西有校訂本】正法眼蔵面授章統絃講議卷之●（●には一五が入る）

※著者名

【両写本】武府（または武江）盛徳禪寺沙門 丑乙堂撰

【西有校訂本】洞上老比丘 乙堂喚丑撰

本来は、両写本の通りの記載であったと思われる。しかし、西有校訂本では、分かりやすいと考えたためか、著者の肩書や表記を改めている。

③書体の問題

本書に引用されている『正法眼蔵』『面授』巻の本文は、天桂『正法眼蔵弁註』に引用されている本文に類似しているものの、所々で独自の字句が見られることが判明している⁷。

しかし、今回の調査から、字句の独自性は翻刻ミスである可能性も出て来た。

※『正法眼蔵』『面授』巻本文

【両 写 本】漢字・変体かな交じり文

【西有校訂本】漢字・カナ交じり文

※引用された『正法眼蔵』本文

※『統絃』本文

※『弁註』引用文

※『講議』本文

【両 写 本】漢字・カナ交じり文

【西有校訂本】漢字・カナ交じり文

大きな違いは、引用されている「面授」巻本文であり、本来の天桂『弁註』写本(龍水本を参照)では「面授」巻本文は、「漢字・変体かな交じり文」として引用され、他の『正法眼蔵』諸巻引用文は「漢字・カナ交じり文」であるから、両写本の書体が『弁註』本来の形式に近いことになる。西有校訂本では、本来の「変体かな」を「カタカナ」に変更してしまったのである。しかも、その時に正確な翻刻が出来なかったのか、独自の仮名遣いとなってしまった。なお、西有校訂本を底本にした『註解全書』では、この部分を「漢字・かな交じり文」に改めている。

④本文の大胆な削除

今回の写本の確認により、西有校訂本では、原本で一部分でも読めない箇所が存在した場合には、該当する一節を丸ごと削除する編集方針を採ったことが分かった。

以下の節が該当している。⁽⁸⁾

a 「面授」巻本文第一五段落に対する「統絃」

具体的には愛学本応卷(下之本)冒頭、興隆寺本悟卷(下之本)冒頭に当たり、西有校訂本であれば第四卷冒頭である。西有校訂本では、第一五段落に相当する「面授」巻本文を挙げた後で、「統絃」部分が無く、直ちに天桂『弁註』第一三〇節へと進む。しかし筆者は、本書全体を通して、この例外が当該箇所のみであることに、以前から疑問を抱いていた。今回、写本が確認され、当該部分に欠落が見られたことで、西有校訂本に「統絃」第一五節相当文が無い理由が判明した。

b 『講議』第六八節—『弁註』第六九節の間

具体的には愛学本法卷(上之末)末尾に当たり、西有校訂本であれば第二巻末尾に相当する。「面授」巻本文第五—六段落の間は、『弁註』本文の長大さや、乙堂の問題意識を承けてか極めて長文の応答となっている。

原本に欠けていたと思われるのは、『弁註』第六九節相当に対する「講議」第六九節相当箇所のごく一部である。部分的に虫損などが見られたのか、愛学本では欠損箇所を四角で

囲い、字の空きを指摘していた。よって、『弁註』第六九節相当箇所は全文が残存しているのだが、「講議」の一部が欠けていたため、西有校訂本では両方とも一節丸ごと削除された。また、西有校訂本第三巻の第六九節（本来なら第七〇節相当）以降は、両写本に見ることが出来るため、西有校訂本では前後の繋がりなどを考えず、とにかく残った部分のみを繋げて編集したことが分かる。

⑤ 本項の小結

両写本で欠けている箇所が、西有校訂本でも編集から除外されていることから、西有校訂本と両写本とは同じ底本を用いて編集・書写が行われたものと推定される。具体的には、西有校訂本凡例から、乙堂自筆本を底本にしたことは明らかであるため、西有校訂本・愛字本・興隆寺本は、それぞれ同じ乙堂自筆本を底本にしたと思われる。

本書の凡例には、「此の書を写し去んと欲する者の、請う、脱誤し、或は己意を以て改削すること勿れ」とあり、両写本は著者乙堂の願いに応えるように書写が行われているが、西有校訂本は改削の手を入れてしまっている。このことから、今後本書の研究を行う場合には、両写本を対校させつつ進めるべきである。

六 結論

本論は、曹洞宗の江戸時代の学僧・乙堂喚丑の主著として扱われる『正法眼蔵統紋講議』について、新たに確認された写本を紹介しつつ、当該資料の意義について検討した。

その結果として、今回紹介した両写本は、従来の研究で用いられていた西有校訂本よりも原本に近い状態であることが分かった。その上で、西有校訂本には編集時の問題があるため、今後は研究の底本としては採用されるべきではないことも判明した。

そして、最も重大なのは、両写本の検討から、従来の西有校訂本には無かった文脈を複数見出すことが可能になり、両写本に残存する部分を詳しく見ることによって、本書の全体像を明らかに出来る可能性も出て来たことである。また、従来曖昧であった、乙堂が参照した『弁註』本文の確定作業も、精度を高めて行うことが可能になったことを意味する。

本書は元々、自筆本が秘蔵されるのみで、乙堂と同時代的に参照された可能性は、ほぼ絶無といってよい。しかし、乙堂喚丑という一人の学僧が、徹底的に『正法眼蔵』本文を読み、検討した結果を知ること、当時正統と目された叡山道白系統の思想的立場について、詳細を知ることが可能になるのである。

【謝辞】

今回の研究に際し、調査及び資料の閲覧・使用を快く許可して下さった長野県山ノ内町興隆寺御住職・山本興仁老師に、御礼申し上げます。なお、興隆寺本『統絃講議』入巻の書写を畔上棟仙禪師が行われた可能性があるとの御教示を賜ったことについて、重ねて御礼申し上げます。

- 1 西有穆山『正法眼蔵開講備忘』については、興隆寺所蔵の写本（旧蔵・畔上棟仙）を参照した。
- 2 『曹洞宗文化財調査目録解題集7（北信越管区篇）』（興隆寺）項（七三―七八頁）を参照した。
- 3 西有校訂本第一巻六丁表、訓読は菅原。
- 4 菅原二〇一三bを参照されたい。
- 5 興隆寺本『正法眼蔵開講備忘』六丁表本文は「統絃講議」とするが、同丁冠註には「統絃講義」とあり、混乱が見られる。
- 6 権田雷斧「禪と浄家の十住心撰属」（『雷斧毒語』所収、権田一九九四、二〇六頁）
- 7 菅原二〇一三bの「註記1」を参照されたい。
- 8 「面授」巻本文の段落数、「統絃」及び「弁註・講議」の数え方、番号については、筆者が独自に付したものである。
- 9 愛学本法巻一丁表。西有校訂本は、この凡例の内容を変えてしまっている。

〈一次資料〉

『永平正法眼蔵菟書大成』（永平正法眼蔵菟書大成刊行会編、大修館書店、一九七四―一九八二）を参照し、引用時は『菟書大成』巻〇〇と巻数を含めて略記した。引用時は、原典に従って訓読しつつ、カナをかなにするなどして、表現を見やすく改めている。

『統絃講議』は、『菟書大成』巻二〇を参照。原漢文の場合、訓読は本書の訓点・送り仮名に従った。なお、国立国会図書館デジタルコレクション（旧・近代デジタルライブラリー）でも全巻が公開されている。

愛学本『統絃講議』は、愛知学院大学図書館情報センターに所蔵。安藤文英・神保如天編『正法眼蔵註解全書』（本文全一〇巻・別巻）無我山房、一九一三―一九一四。

〈二次資料〉

権田雷斧『権田雷斧著作集』巻一四、うしお出版、一九九四
曹洞宗文化財調査委員会編『曹洞宗文化財調査目録解題集7（北信越管区篇）』曹洞宗事務庁、二〇〇六
菅原研州「乙堂喚丑『正法眼蔵統絃講議』の研究」『印度学仏教学研究』第六一巻第二号、二〇一三a
菅原研州「乙堂喚丑の『正法眼蔵』註釈の研究」『印度学仏教学研究』第六二巻第一号、二〇一三b

〈キーワード〉 近世仏教、曹洞宗、正法眼蔵統絃講議

（愛知学院大学准教授・修士）